

## 初級学習者用の語彙サイズテストの開発

### — 試作テストの開発と予備実験の結果から —

佐藤 剛 弘前市立常盤野中学校

#### 要旨

語彙サイズテストとは、学習者がどれだけ多くの語彙を習得したか、つまり語彙の広さを測定するためのテストである。語彙は英語の熟達度を示すひとつの指標であることが、多くの先行研究から指摘されており、これまでどのようにして学習者の語彙サイズ測定をするのかという点において多くの研究がなされ、また様々なタイプの語彙サイズテストが開発されている。しかし、現存する語彙サイズテストは難易度や元となる語彙リストなどの点において日本の初級学習者である中学生に適応しているとは断言しがたい。そこで本研究は、日本人初級英語学習者用の語彙サイズテストの開発を目的とする。中学生用の検定教科書6社で使用されている語彙の出現頻度と使用教科書数をもとに昨年度の研究で開発した、語彙リスト、1324語すべてに教科書巻末の日本語訳を参考に定義づけを行った。さらに出現頻度200語ごとに区切り、そこからそれぞれランダムに語彙及び定義を自動抽出し、多肢選択式の語彙サイズテストを作成するプログラムをエクセルで作成した。そのテストを中学生5名に実施し、その正答数(正答率)と実施後のアンケート、及びリロトスペクションの結果から、語彙サイズテストの精度の検証を行った。結果、それぞれのテストの正答数に有意な差は観察されず、今回ランダムに抽出された3つの種類のテストはどれも等質なものであるということが実証的に明らかにされた。

【キーワード】 語彙サイズテスト 語彙リスト 語彙指導 中学生

#### 1. はじめに

これまで学習者の語彙を測定するテストについて、多くの研究が行われさまざまなテストが開発されている。特に学習者の語彙を「広さ」という側面から測定する語彙サイズテストは Vocabulary Levels Test (Nation, 1990; 2001) をはじめとして、元となる語彙リストの種類やそのテスト形式などにおいて数多くのテストが存在する。(Meara and Buxton, 1987; Meara, 1992) (望月, 1998) (佐藤, 2003) それは語彙サイズが学習者の熟達度を示す一つの規準となることが多くの研究で実証されていることがひとつの理由である。Meara(1996)、Koda(1989)、Laufer(1992)、Arnauld(1992)。より多くの語彙を知っていれば、英語をよりよく読むことができ、聞くことができる。また、よりよい英語を話したり書いたりすることができるということは、自ら英語を運用する立場に立っても、また指導者として学習者を指導する立場に立っても直感として納得のいくことである。すなわち、語彙のサイズを知ることは、その学習者がどれだけよく英語を運用できるかということに強く関係しているのである。

加えて、英語の学習・指導という側面においても語彙のサイズは非常に有効である。語彙サイズテストを学期に一度、年度末毎になど定期的かつ継続的に実施することによって学習者は学習の結果をして自分自身の現段階でのレベルを知り、さらに次の目標を設定しそれに向かって努力することができる。さらに、自分の語彙数がどのように伸びていくのかを縦断的に知ることができるのである。また、指導する際においても自分が指導する学習者の語彙サイズを客観的な数値として把握して指導することで、学習者のレベルに応じ

た指導が可能となる。また、継続的・定期的に自分の指導している学習者の語彙サイズを測定することで、横断的もしくは縦断的に生徒の語彙サイズの変化を数値として把握することが可能となる。それによって自分の語彙指導を省み、以後の指導を改善していくことができると考えられる。

しかし、これまで開発されてきた多くの語彙サイズテストを、初級英語学習者である日本人中学生に、そのままの形で実施することは、その難易度やもとななるリストという点において困難である。そこで、本研究ではこれまで開発されてきた語彙テストを理念、手法の点から吟味することで、日本人初級学習者専用の語彙サイズテストを開発することを最終目標としている。今年度は中学生用の検定教科書の出現頻度及び使用されている教科書数をもとに昨年度の研究で開発した語彙リストをもとにレベル1からレベル6の6つのレベルからなる試作テストの開発をおこなう。さらにそのテストを実際の中学生を対象にパイロットテストとして実施しその正答数とアンケート調査、実施後のリトロスペクションなどの結果から効果及び精度の検証を行いたい。それと同時にテストの開発の過程及び、予備実験の結果、生徒のインタビューから得られたデータの考察から、語彙指導に関して改善の糸口を見出す事を目的としている。

## 2. 先行研究

Meara(1996)、Koda(1989)、Laufer(1992)、Arnauld(1992)など多くの先行研究において、語彙は英語の熟達度と強い関係があると指摘されていることが挙げられる。言い換えれば、ある学習者の語彙サイズを測定することによって、その学習者がどれくらい英語使用において習熟しているのかを推測することができるのである。このことは多くの研究で実効的に証明されていることはもちろんであるが、単語をたくさん知っていれば、よりよく英文を読解したり聴解することができる、また、語彙が豊富な人はそれだけ円滑に会話などコミュニケーションをとることができるということは十分納得のできることであろう。

現在、使用されている語彙サイズテストには以下のようなものがある。

- ① Vocabulary Levels Test(VLT) (Nation, 1990; 2001)
- ② チェックテスト(Meara and Buxton, 1987; Meara, 1992)
- ③ 語彙サイズテスト (望月テスト) (望月, 1998)
- ④ 英語学習者のためのレベル別語彙テスト (佐藤, 2003) (<http://www.zen-ei-ren.com/>)

以上の様に、これまでさまざまな語彙サイズテストが開発され、またそれぞれ妥当性、信頼性を向上させるために追実験が行われ、選択肢や定義などの変更や問題数などの点で改良が行われている。しかし、現時点で開発されている語彙サイズテストを中学生を対象に実施するには以下にあげる3つの問題点がある。1つ目は、難易度である。多くの語彙サイズテストは、成人など主にある程度熟達した学習者を対象としている。そのため、語彙の難易度が高すぎて中学生には適さないものが多い。また、テストによっては受験可能なものもあるが、一番低いレベルのテスト一種類のみということもある。中学生の語彙レベルに適合し、さらにそれを細分化、レベル分けをして測定するテストの開発が必要である。

2点目として、語彙サイズテストのもとななる語彙リストの性格が挙げられる。現存する語彙サイズテストはBNCやそれをもとに作られた真正性の高い語彙リストをもとにし

て作られている。このような語彙サイズテストは、自分の語彙力が現実の場面での英語運用にどれだけ対応できるかという点を測定することができるというメリットを持つ反面、普段教科書を中心に英語を学習し、教科書が主なインプット源である日本の中学生の習得している語彙とは種類や頻度の点において異なると考えられる。中学生が学習している教科書を基準として語彙リストを整備し、それに基づいて語彙サイズテストを開発する必要性がある。

3点目として、多くの語彙サイズテストには複数のバージョンがないことが挙げられる。すなわち、あるレベルのテストは一度ずつしか受けられないということになる。既存のテストがそのような形式をとっているのは、信頼性と妥当性の問題などテストの精度を高めることが目的であると考えられる。しかし中学校の英語の授業で使用するという点から考えると、テストに数種類のバージョンがあり、何度かそれに挑戦できるタイプのテストのほうが生徒の語彙学習には有効であると考えられる。このテスト形式であれば、一度不合格になったレベルにも、そのレベルに合格しようと学習し何度も挑戦することや、短い期間に繰り返しテストをすることも可能である。

そこで本研究は、以下の3点の性格を持つ語彙サイズテストの開発を目的とする。

- ① 初級外国語学習者である、日本人中学生用に応じた語彙レベル、語彙の頻度であること。
- ② 教科書をもととした語彙リストから作られた語彙サイズテストであること。
- ③ 複数のバージョンを持ち、同じレベルのテストに複数回挑戦できるものであること。

### 3. 開発手順

#### 3-1 昨年度の取り組み

日本人初級学習者用の語彙サイズテストを開発するにあたり、昨年度は、以下の手順で主にそのもととなる語彙リストの作成を中心に研究を進めた。

- ① 平成14年度版、平成18年度版の検定教科書6社3学年分の本文をデータ化し、コンコーダンサーAntConcを使用し頻度順の語彙リストを作成。この段階でリストの総語数は98996語であった。
- ② 人名(Shun, Aki, Jim)や国名(Japan, the U.K., China)、言語名(English, Japanese, Spanish)などの固有名詞、冠詞(a, the)、数字(1, 19, 10:30)をリストから削除。
- ③ 派生形(規則変化の動詞の過去形、現在分詞形、過去分詞形、規則変化の形容詞の比較級、最上級、名詞の複数形)は原形に加算。
- ④ 東京都中英研研究部の語彙リストを使用し、1社の教科書のみに出現している語をリストから削除。
- ⑤ 東京都中英研研究部選定発表語彙リストと比較し、本研究の語彙リストの精度を検証。

以上のような過程から、中学生が学ぶべき1315語を選出し語彙サイズテストのもととなる語彙リストを開発した。

#### 3-2 今年度の取り組み

##### 3-2-1 語彙リストの見直し

初級学習者用の語彙サイズテストを開発するにあたり、もう一度リストを見直した。上記3-1、①から⑤の過程においてリストから削除されてしまった語彙の中にも、中学生が学習するべき語彙があるのでないかと考えたためである。特に、自分の国名や母国語であるJapanやJapanese、学習している言語であるEnglishなどは、学習者が自己紹介をはじめとする多くの場面で必要とすると考えたためである。そこで削除してしまった固有名詞の中から、以下の2つの基準に該当する固有名詞を語彙リストに追加することにした。

- ① 6社の検定教科書のうち2社以上の教科書に出現していること。

② 人名でないこと

以下の 9 語が上記 2 つの基準に該当しリストに追加された。指導者としての直感としてもいずれの語彙も中学生なら習得すべき語彙として十分に妥当なものであると考えられる。その結果、本研究のリストの総語数は 1324 語となった。

America, American, Chinese, Japan, Japanese, Canada, Australia, London, Korean

3 - 2 - 2 定義づけ

次に、語彙リストに出現するすべての語彙に定義づけを行った。これは、語彙サイズテストの選択肢および錯乱肢となるものである。何らかの英和辞典の定義を活用する方法もひとつの案として考えたが、教科書の巻末の定義は教科書の題材や文脈に対応しており、頻度や中心となる定義を中心に掲載している英和辞典のものとは異なること、さらに、本研究の語彙サイズテストの特徴である、日本人中学生の語彙のインプットの中心である教科書を基本とすることを重視して、教科書巻末の定義から語彙の定義づけを行うことにした。

まず、中学校検定教科書 6 社、3 年間分、平成 14 年度採択、平成 18 年度採択の 2 種類すべてにおいて、本研究で開発された語彙リストがどのような定義づけをされているのかをチェックし、以下のような形でエクセルの表の形でまとめた。

表 1 教科書をもとにした語彙の定義づけ

20	she	680	彼女は(が)	彼女は(が)、あの女の人は(が)(私とあなた以外の女性1人を指す言葉、年齢などに関係なく使われる)	(前に出た女の人の人を受けて)彼女は(が)	彼女は(が)	彼女は(が)	彼女は／が
21	am	662	～である	(かならずとともに使って)～です、～だ、～である am～ing(現在進行形(～していると	①…です。…である。 ②…にいる 進行形をつくる	(わたしは)～である (わたしは)～している	(わたしは(～です)	(1とともに使う)～である、～にいる (am～ingで)～している
22	yes	649	はい、そうです	1. (質問に答えて)はい、そうです 2. (相手のことばに同意して)そうです、そのとおりです 3. (呼びかけなど	①はい、ええ、そうです ②(呼びかけに対して)はい	(返事で)はい	(問に対して)はい、(そうです)	はい、そうです
23	what	648	何 ①何の ②なんて～だろう	何(が・を) 何の、どんな	何 何の (驚き、戸惑いなどを表して)えっ、	何、どんなもの(こと) なんお、どんな	何、何を、何の	何が／を／に 何の、どんな
24	can	642	①～する事ができる ②～してもいいですか(許可、容認を表す) ③can you～?～してくれませんか。(相手に対する依頼を表す) 缶	1. (can you～?の形で)～してくれますか。 2. (能力を表して)～(が)できる。 3. (状況などから)～してもよい 4. (可能性を示して)～することができる	①(能力・可能)…できる ②(許可)Can I…?～してもいいですか。 ③(依頼)Can you…?…してくれますか?	①I can go for that.それにします ②～することができます ③(依頼を表して)～してくれますか。 ④～でありうる、～することができる ⑤(許可を求めて)～していいですか	～できる、～してもよい	①～(～することが)できる ②(許可)～してもよい

横軸に語彙をとり、縦軸はそれぞれ 6 社の教科書でその語彙がどのように定義づけされているかが示されている。それぞれの教科書によって、表記法やその詳しさ、取り上げる順序において大きなばらつきがあることが見て取れる。次に、それをもとにして、以下の流れに基づいて、語彙テストの選択肢となる定義を作成する。

① 検定教科書 6 社すべてで同じ定義づけがなされているものについては、そのままそれを語彙リストの定義として採用する。

school	324	学校	学校	学校	学校	学校	学校
--------	-----	----	----	----	----	----	----

「学校」としてリストに定義づけ

「go の過去形」としてリストに定義づけ

went	173	goの過去形	goの過去形	(goの過去形)	goの過去形	go(行)の過去形	goの過去形
------	-----	--------	--------	----------	--------	-----------	--------

② 教科書によって異なる定義づけがなされているものについては、できるだけすべての教科書の定義が包括される形で語彙リストの定義づけを作成する。

book	169	本	本書物	本	本	本	本
------	-----	---	-----	---	---	---	---

「本、書物」としてリストに定義づけ

walk	116	①歩 ②～を散歩させる 散歩	歩、散歩する	歩、歩いてく (来る)	歩、～に散歩さ せる	歩 散歩させる 徒歩 散歩	歩
------	-----	----------------------	--------	----------------	---------------	---------------------	---

「歩く、散歩させる」としてリストに定義づけ

③ a lot of, would you, could you, of course, for example など教科書において連語でひとつの意味として扱われている語彙については、連語の形でリストに掲載し直し、連語として定義付けを行う。

### 3 - 2 - 3 試作テストの開発

定義づけが完了したリストをもとにして語彙サイズテストを作成する。まず、1324 語のリストのレベル分けを行った。本研究で開発する語彙サイズテストでは、総語数 1324 語を 200 語ずつ 6 つのレベルに分けた。レベル 1 からレベル 5 まではそれぞれ 200 語ごと、レベル 6 のみ 324 語という形である。

次に、テスト形式であるが、さまざまなテスト形式の語彙サイズテストがこれまで開発されているが、本研究で開発する語彙サイズテストでは、Vocabulary Levels Test(VLT) (Nation, 1990; 2001) や英語学習者のためのレベル別語彙テスト (佐藤, 2003) のテスト形式を採用することとした。これらのテストは、3 つの定義に相当する英語を 6 つの英語の選択肢から選択するという形式である。これを採用した理由としては、1 つ目として、Vocabulary Levels Test(VLT)は世界標準の語彙サイズテストであり、これまで多くの研究者によって追実験が行われ、その妥当性、信頼性が検証されてきたテストであるということが挙げられる。もちろん妥当性や信頼性はテスト形式だけではなく、そのテスト項目、錯乱肢など多くの要因との有機的な関連の中で確認されるものではあるが、さまざまなテスト形式や選択肢の数等の要素を検証し、開発されたこの形式は信頼性の高いものであるといえる。2 つ目として、その経済性があげられる。通常用いられる 4 択問題では、測定する語彙 1 語に対し錯乱肢を 3 語必要とする。Vocabulary Levels Test(VLT) (Nation, 1990; 2001) と同様に 27 語をテストに出題するとすると  $3 \text{ (錯乱肢)} \times 27 \text{ 語} = 81$  の語彙をリストから出題しなければならない。英語学習者のためのレベル別語彙テスト (佐藤, 2003) のように 36 問出題するとすると、 $3 \text{ (錯乱肢)} \times 36 \text{ 語} = 108$  語の錯乱肢が必要となり、問題数を増やせば増やすほど、必要な錯乱肢が膨大に増えていくこととなる。先に述べたように本研究では、1324 語を 200 語ごとにレベル分けをしてテストを作成する。その 200 語からテストする語を 27 語、錯乱肢を 81 語をランダムに抽出するとすると、確率的に被験者は 2 回に 1 回ある語に遭遇するというようになってしまう。言い換えれば被験者は、同じレベルのテストを 2 度受験すると選択肢、錯乱肢いずれかの形ですべての語彙に遭遇してしまうのである。

一方、Vocabulary Levels Test(VLT) (Nation, 1990; 2001) や英語学習者のためのレベル別語彙テスト (佐藤, 2003) で用いられているテスト形式では、測定する語彙 3 語に対して選択肢が 6 語という形式であり、27 問出題しても、それに必要とされる錯乱肢は 27 語である。テストする語彙 27 語、錯乱肢として使用する語が 27 語で 54 語でテストをす

ることができるのである。母数が 200 語であるので、この形式であれば被験者がある語に遭遇する確率は約 4 回に 1 度の割合である。本研究の特徴のひとつである「バージョンを変えて何度も使用できる語彙サイズテスト」という特徴を生かすためにも、この形式は非常に有効であると考えられる。

次に、6 つのレベルそれぞれに含まれる 200 語から、27 語の語彙及び錯乱肢となる語彙 27 語をランダムに抽出する。これにはエクセルの関数及びマクロを使用した。表 2 はそのエクセル画面を表示したものである。まず、RAND 関数と RANK 関数を使用してエクセルの A 列と B 列に 1 ~200 の乱数を発生させる。それを検索値として VLOOKUP 関数を使用し、それぞれのレベルの語彙リストから C 列に語彙、D 列に定義を引用する。次に O 列から W 列にテストする語彙を 3 語と錯乱肢となる語彙を 3 語の合計 6 語ごとのセットに分けて引用し、テストの画面に反映させる。この時点では 6 つのセットのうち上 3 つがテストする語彙、下 3 つが錯乱肢という形で並んでいる。最後に G 列に RAND 関数で乱数を発生させ、並び替えによって 6 つのセットをランダムに並び替えるという操作を行う。操作ボタンをテスト画面の上部に設置し、以上の操作をボタンをクリックするだけで行えるように設定した。以上の操作により、200 語のリストから 27 語のテストする語彙と 27 語の錯乱肢となる語彙をランダムに抽出し、それをランダムに並び替えるテストが完成した。

図 1 エクセル上のテスト作成画面

A 列、B 列に乱数表を発生させる  
それをもとに、リストからランダム  
に語彙と定義を抽出する

すべての操作を一度に行うボタンを  
設定。

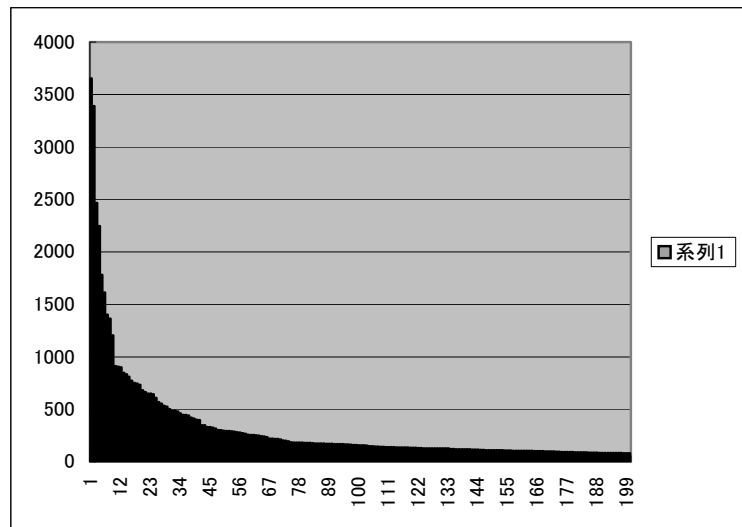
以下の表 2 及び図 2 はレベル 1 の出現頻度を示したものである。レベル 1 はもっと

も頻度の高いものであるが、出現頻度 1 番目の is (出現頻度 3654) と出現頻度 200 番目の show (出現頻度 81) であり、頻度間に大きな差が見られる。その両者を同じ重さで測定するには問題がある。そこで、レベル 1 のテストについてのみ上位 9 語までの語彙の中から必ず 1 語が 27 問のテストに出題されるように設定を変更した。

表 2 レベル 1 の上位 15 語

	語彙	出現頻度
1	is	3654
2	I	3388
3	you	2466
4	to	2246
5	it	1779
6	in	1612
7	and	1400
8	do	1364
9	not	1205
10	of	913
11	have	905
12	this	899
13	he	847
14	we	834
15	are	809

図 2 レベル 1 の頻度と出現順位



#### 4. 予備実験の実施

開発した試作テストの精度を検証するために、実際の中中学生を対象に予備実験を行った。Nation(2011)の「語彙サイズテストを実施する前にパイロットテストでチェックすべきポイント」に則って行った。それによると大規模な被験者でのテスト実施のまえに、以下の項目を少ない人数の被験者で実施する必要があるとされている。具体的な項目としては、実施時間、テストの難易度、指示文の明瞭さ、分かりやすさ、被験者が実施者の期待するように受験しない可能性、テストのフォーマット、アクティビティーに受験者が不慣れな可能性、などである。

テストの対象となるのは、青森県公立中学校に通う 1 年から 3 年の中学生 5 名である。中学 1 年生は、200 語レベル、2 年生は 400 語レベル、3 年生は 600 語レベルの語彙サイズテストを 3 バージョンそれぞれ受験する。その後、アンケートに回答する。最後に語彙サイズテスト結果およびアンケートの回答に関連して、インタビューを行った。

データの分析方法であるが、被験者が少数であるので今回は、実施している様子の観察、語彙サイズテストの結果、アンケート、インタビューをそれぞれ被験者を質的に分析する事が主な手法となる。ただし、3 バージョンの難易度の比較を行うために  $\chi^2$  乗検定を実施した。

#### 5. 結果

表 3~5 はそれぞれの語彙サイズテストの正答数 (正答率) を示している。

表 3 200 語レベル (中学校 1 年生)

	テストバージョン 1	テストバージョン 2	テストバージョン 3
被験者 1	24 (88%)	26 (96%)	24 (88%)
被験者 2	23 (84%)	22 (76%)	24 (88%)
合計	(86%)	(86%)	(88%)

表 4 400 語レベル (中学校 2 年生)

	テストバージョン 1	テストバージョン 2	テストバージョン 3
被験者 3	27 (100%)	25 (92%)	27 (100%)
被験者 4	27 (100%)	24 (89%)	25 (92%)
合計	(100%)	(91%)	(96%)

表 5 600 語レベル (中学校 3 年生)

	テストバージョン 1	テストバージョン 2	テストバージョン 3
被験者 5	26 (96%)	27 (100%)	26 (96%)

正答数、正答率ともに 3 つのテスト間に差は見られず、レベル 1 およびレベル 2 については得点の高い生徒は 3 つのテストいずれにおいても高く、得点の低い生徒は同様にいずれのテストにおいても低い。χ<sup>2</sup> 乗検定においても 3 つのテストの正答数に有意な差は見られなかった。ランダムに抽出されたテストはどれも難易度は同程度であるという結果が出た。

表 6 アンケートの結果

被験者 (学年)	実施時間	難しさ	指示文の明確さ	テストフォーマット
被験者 1 (1)	15 分	難しい	分かりやすい	見にくい
被験者 2 (1)	15 分以上	難しい	分かりやすい	見やすい
被験者 3 (2)	5 分	難しい	分かりやすい	見やすい
被験者 4 (2)	5 分	難しい	分かりやすい	見やすい
被験者 5 (3)	5 分	難しい	分かりやすい	見やすい

表 6 は語彙テスト実施後にアンケート結果を示している。アンケートの結果から 200 語レベルのテストを受験した中学 1 年生の 2 名が、テストを解答するのに 15 分、またはそれ以上かかるというように回答している。実際のテストを受験している様子を観察した際も、この 2 名は非常に苦戦している様子が見られ、実際の所要時間も 12 分から 17 分であった。他のレベルは全員が 5 分以内で解答できると答えた。難しさに関しては、全員が「難しかった」と答えた。次に指示文については全員が「分かりやすい」と答えている。初めて受験する形式のテストであったが全員が戸惑った様子もなく、質問もなくテストに取り組んでいた。テストのフォーマットについては 1 名が「見にくい」と回答した。インタビューの際に詳しく質問したところ、「語の定義が長すぎて読むのが大変である」事が原因であった。

インタビューでは、どのように解答しているのかを質問した。その結果、5 名はそれぞれ実に多様な手順でテストを解答している事が明らかになった。被験者 1 は、まずは、語の定義をすべて読み、それを頭に入れて語彙を検索する形で解答していた。被験者 2 は英語の語彙を主に見ながら、それにあたる定義を思い浮かべ、それに近い選択肢を選ぶという形で解答していた。被験者 3 は語彙をすべて覚えて、分かるものからまず解答していき、残ったものは消去法を使用して解答していた。被験者 4 と被験者 5 は、定義にあたる語彙を 1 つずつ検索していく形で解答していた。

また、使用している教科書に出てこない単語や、難易度が高いと思われる語について正答している場合は、どのようにして解答したのかを質問した。結果、被験者は非常に多彩な方略を用いてテストを解答している。最も多く使用されていたのが消去法である。ターゲットとなる語が分からなくても、選択肢でこれは絶対当てはまらない



というものを消去し、結果残ったものを解答するという方法である。次は、外来語の活用である。area など英語のスペルとしては初見のものでも、何とか「エリア」と読む事ができれば適切に解答する事が可能である。次に、教科書外のインプットの活用である。自分たちが使用している教科書に出現しない語彙でも、生徒はさまざまなものから語彙をインプットしている事が明らかになった。もっとも多かったのがクラスルームイングリッシュであり生徒から「先生がよく授業中に使っている」との回答が数多く聞かれた。No problem.の problem や It's important.の important.などがそれにあたる。また、授業外でも歌詞や英語学習のテレビ番組、テレビゲーム、さらに、その語彙が学校のテーマであるなど生徒の学習源は多岐に渡っている。

## 6. 考察

200語のリストから、エクセルの関数を使用してランダムに27語のアイテムを抽出し作成した3つのバージョンのテストは、その正答数に有意な差が見られなかったことから、この方法で語彙サイズテストを作成しても、等質なものとなる可能性が高いといえる。ただし、今回は被験者数が非常に少なく、さらに大きな被験者を対象にした実験を行い、実証的な検証をする事が求められる。

200語レベルのテスト時間が、他のレベルよりも10分以上多くかかってしまった。このレベルは最も頻度が高い語彙レベルのテストであるので被験者に1年生を選んだのであるが、頻度が高いからといって、それが必ずしも1年生で学習する語彙とは限らないことが原因である。実際、このレベルの語彙リストには、動詞の過去形、will、becauseなど2年生以上で学習する語彙が多く含まれおり、未習語の割合がもっとも多かった。頻度を基準に難易度を設定しているが、頻度が必ずしも生徒の感じる難易度とは一致していないという事が明らかとなった。レベル1のリストの見直しを示唆する結果である。

また、生徒一名から「定義が長すぎて読みにくい」との回答あった。特にtakeやgetなどの多義的な動詞や、用いられる場面や文脈に応じて意味が変化する前置詞などがそれに当たるのだが、語彙の定義はできるだけシンプルにするように見直す必要がある。

最後に、受験者によってテストを受ける際の手順に大きな差があることであるが、これはある程度テスト作成者の意図に沿うように受験させる事が必要である。テストを受ける際のガイドをテストに表記するなどの工夫が必要である。

## 7. まとめと教育的示唆

本研究は、初級英語学習者である中学生用の語彙サイズテストを開発することを目的としたものである。中学生の主な語彙のインプット源である教科書をベースに、自動的に語彙をリストから抽出し、1つのレベルから多くのバージョンのテストを作成できるようにした。それを使用して、実験を行った結果、異なるバージョンでもその難易度は一定に保たれ可能性がある事が明らかとなった。また、400語レベル、600語レベルにおいては所要時間も非常に短くて済むが、レベル1は難易度が高く、リストの見直しが必要であること、長い定義はシンプルに訂正することなど多くの有意義なテスト改良の視点を導く事ができた。

さらに、実験を通して生徒の語彙の学習源は多岐に渡っている事が明らかとなった。生徒から聞かれた教科書以外の学習源はティーチャーズトークやクラスルームイングリッシュであることから、我々英語教師ができるだけ英語を使用する事が生徒の語彙サイズを拡大する上で非常に有効である可能性は高い。また、生徒が教科書以外のどのようなものから語彙を学習しているのかをある程度把握しておく事で、生徒の興味関心に応じた、効率

的な語彙指導が可能となる。

今回の研究を通して、現在開発している語彙サイズテストの精度がある程度検証された。今後は、実験結果から得られた考察をもとにテストを改良し、より大きな被験者を対象にテストを実施し、得られたデータを量的に分析することによって、精度を実証的に検証し、さらなる改良を加えていきたい。

### 参考文献

- Meara, P. (1992). EFL Vocabulary Tests. Centre for Applied Language Studies, University College Swansea.
- Meara, P. and Buxton, B. (1987). An Alternative to multiple choice vocabulary tests. *Language Testing*, 4, 142-151.
- Nation, I.S.P. (1990). *Testing and Learning Vocabulary*. Boston, MA: Heinle & Heinle.
- Nation, I.S.P. (2001). *Learning Vocabulary in Another Language*. Cambridge University Press.
- Nation, I.S.P. and Webb, S. (2011) *Researching and Analyzing Vocabulary*. Boston: Heinle Cengage Learning.
- Reppen, R. (2001). Corpus linguistics and language teaching. 『英語コーパス研究』, 8, 19-28.
- 磯達夫・相澤一美. (2009). 「語彙サイズテストの結果解釈と読解力の予測：語彙知識推定への3つのアプローチ」. 『第35回全国英語教育学会鳥取研究開会発表予稿集』 pp216-217
- 佐藤留美. (2003). 「新学習指導要領をふまえた中高生を対象としたレベル別語彙テストの作成」. 『STEP BULLETIN』 15, pp 25-37.
- 望月正道・相澤一美・投野由紀夫. (2003). 『英語語彙の指導マニュアル』。大修館書店